

発表 福谷さん

羽藤先生

どういう新しい概念が浪江を扱う際に考えられるか。

福谷

今まで震災による個人の心情の変化に関する分析はこういう分野ではされていない。

羽藤先生：長期避難の場合はプレテキストそのものが消失していく。それを記述していくことが重要。プレテキストをうまくデザインしていく。プレテキストでTrondheim市にあって、浪江にないものなどあるか。

福谷：タイトコミュニティに遷移したものがある。プレテキストが完全に消失したという遷移が特徴的。それを今回復しようとしている。

羽藤先生：無数のインタラクションが再生しようとしている。多様なコミュニケーションを記述した方が良いがそれはされていない？

福谷：足りていない。

羽藤先生：ネットワークそのものの形態を記述することもある。ナラティブに抽出する。社会学的な論文のアプローチになるので、概念整理が十分にできていないので、概念を整理した上で、叙述の部分のテキスト化した方が良い。

被災地のコミュニティが同遷移したのか。どんなパターンがあるのが整理する。それは災害地でも違うと思う。次の災害の時にどう対応して、支援していくべきかわかる。コミュニティの質は変わっていくので、トランスフォーメーションの類型が整理される。

災害後の何かにポジティブなものを与えるのか？

近藤：地域がどういうコミュニティを形成しているかによって、支援の形も異なる。インタラクションプレテクションが少ないところだと発想もない。

羽藤先生：コミュニティのプレテキストと被災する、しないが関係ある。

近藤：どういうコミュニティかによって、相互に支援する都市や他の地域が集落と都市の避難は地理的な条件だけで説明できるわけではないので、潜在変数として入れなければいけないけど、難しい。

須藤：インタラクシヨンプレテキストについて、暗黙の了解、その土地にすでに根付いている文化があることでその地域に入ることができる。断絶が起こっている地域でも徐々に融和していける。

福谷：インタラクシヨンプレテキストは土地に関する約束事だけでなく、日常の顔を合わせるきっかけも含まれる。

羽藤先生：話しかけても良いきっかけは、暗黙の同意や些細なとっかかりを共有していることが重要。知らないと話しかけてはいけないと思う人もいる。

福谷：電車に乗っているだけで話しかけられるように、個人のハードルが低い場合もある。外的なものもある。

加藤：研究と浪江の特徴であるない状態からどう形成するか、いろんな地域で比較したら面白い。

羽藤先生：更地に入っていくのとは違うのか。

福谷：もともと住民の人がいるから緩和されていることがある。

羽藤先生：対立、分離が容易に起こりやすくなる？

福谷：復興住宅の場合は、インタラクシヨンプレテキスト事態が多い。移住者の方が集まって活動する事例もある。自治会を作るインタラクシヨンプレテキストが必要。

奥田：復興住宅の話で、いろんな人が来ていて、実際去年の夏に調査票を渡す時にいろんな人と話した。その時に希望がないと言っている人がいた。そのまちでインタラクシヨンがないといていた。そういう方はコミュニティから排除されている。公営住宅というコミュニティでも複雑に絡み合っていて、綺麗に分類するのは難しそうだった。地方都市だと外から入ってくる人もいるけど、コミュニティとして馴染んでいない人が入ってくる。どううま

くやっていくのかはどこの都市にいても大事。仕事で入ってくる人など。街としてどう関わるかを研究していかなければいけないと思った。

福谷：浪江は元々原発の人など、地域に溶け込んでうまくやっけていける人が多い。

羽藤先生：加害者である意識がある中でどう関わるか。分断されている。それをどう論文で書くかも考える必要がある。

任意活動はカレンダーに書いていない活動がで、習い事はカレンダーに書いてあり予定が決まっている。住み分けがわからない。

福谷：余暇の集まりは折衷だと思う。物理的な質が重要。大きさや施設管理のしやすさが重要だから設計が重要。

インタラクショナルプレテキストでスマホなどで奪われることがある。

福谷：スマホは行きたかったところにいけなかったものを支援するので大丈夫な気がする。相乗りによってインタラクショナルプレテキストになることもあると思う。拠点と移動の設計が大事。

白井：元々強固なものがあれば入っていける。元々いる人たちが新しく入った人たちに紹介してくれる。来てくれたという意識が強いので、インタラクショナルプレテキストが生まれて、受け入れの気持ちがないと分離してしまう。どっちになるのか考えるのも重要。

羽藤先生：外部の人そのものがインタラクショナルプレテキストになる。入る側として考えがち。

松永：シェアモビのところでそもそも自分の車を持たない、ガソリンスタンドが交流拠点というイメージがなかった。どういう枠を作るのが重要だと感じた。

福谷：お金を払ってまちが掃除するのではなく、自分達が掃除する。必要としない人は確かにいて、必要としないならそれで良い。浪江では必要とするけどない人が結構いる。自分達で掃除するシステムがあればインタラクシオンが生まれる。システムにどうプレテキス